ルーマニア語における冠詞について

林　　博司

1. はじめに

冠詞の問題は、冠詞を持たない言語である日本語を母国語としている我々にとっては、最も厄介な問題の一つである。その原因の最大のものは、冠詞に対する直観が全然湧いてこない、ということであろう。しかしこの直観も、湧きすぎると却って言語学的記述の障害となる場合がある。たとえば日本語の「は」と「が」の使いわけは、日本語を母国語とする人なら誰でも直観的に行なっているが、これを正確に、言語学的に記述するのは大変困難である。冠詞の問題も正にこの類のものである。従って、冠詞の問題を扱かった論文、研究書で、単なる用法の羅列ではなく、本当の意味での言語学的価値のあるものは極めて少ない。その少ない中で最も評価されているのは、何といってもG.Guillaume とその一派の業績であろう。（Guillaume（1919, 1964）参照、また彼の考え方をわかりやすく解説しつつ自分の考えも入れているのにMoignet（1981）がある。）彼は言語を二つのレベル、langueとdiscours に分け、langueに属するsignifié de puissance が具体的なレベルであるdiscours で signifié d'effet として現われる、即ち、別の言い方をすれば、概念が言語化される、そのための道具として冠詞をとらえている。つまり、冠詞がつくことによって概念が言語化される訳である。これを図式的に示すと次のようになろう。

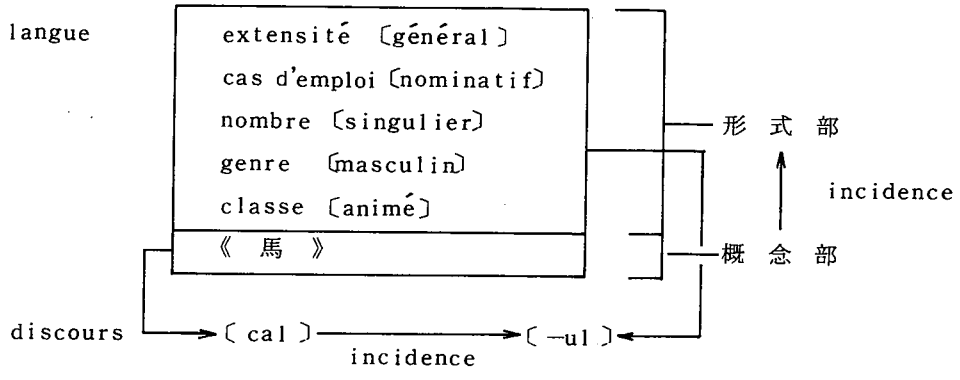
langue（概　念）　　《馬》

discours（言語要素）　　calul　　un cal　　cal[1]

<第 1 図>

ここでは概念は対応する言語要素として名詞を取り上げたが、冠詞と最も密接な関係があるのは名詞である。従って冠詞の問題を考える時は名詞のことも考えねばならない。ここでGuillaume 派の品詞論を述べることは到底できないし、またその場でもないのだが、必要最少限度のことだけは述べておかねばならないだろう。Guillaume 理論における品詞論の根幹をなすのは〝incidence〟の概念であり、名詞は、このincidenceが形式部（côte formel）と概念部（côté notionnel）の間にのみ存在し、外部には向かわない、という性格によって特徴づけられている。[2] Moignet（1974, 1981）によれば、名詞の形式部は、extensité, cas d'emploi, nombre, genre, classe, personneの六つを含んでいる。（この中でpersonneが最も基本的なものである。）そして、この形式部に対して概念部からの内的incidence がかかってくるのである。[3] 以上は langue のレベルでの話であるが、この langue の名詞がdiscoursレベルの名詞になる、即ち言語化される時に冠詞が現われる。そしてこの冠詞は langue レベルの名詞のもっていた形式部をそっくり引き継ぐ役割を

果たす。その結果として、incidenceも概念部→形式部というものから、冠詞（形式）←名詞（概念のみ）という形に変わることになる。[4] 前の馬を例にとると、calulでは、extensité〔général〕cas d'emploi〔nominatif〕,nombre〔singulier〕,genre〔masculin〕,classe〔animé〕という形式部が－(u)lという定冠詞として現われてきていることになる。[5] un calではextensitéが〔particulier〕に変わる。このことを図式的に示すと第二図のようになろう。



＜ 第2図 ＞

Guillaumeが扱かったのは上の形式部のうちextensitéに関する事柄で、これは定冠詞・不定冠詞の区別にかかわってくる。Guillaume派の冠詞論はこの定・不定（正確には一般性・個別性）のみであり、もちろん冠詞を考える上で、定・不定の問題は最も重要だと思われるが、やや一面的すぎるきらいがないでもない。本稿では概観的な記述はできるだけ避け、Guillaume派の理論では余り扱われなかった部分に焦点をあてたい。前に述べたように、定・不定の問題（つまりextensité）が最も重要なのであるが、これについてはGuillaume派の人たちの研究があるのでここでは触れないことにする。即ち、定冠詞、不定冠詞の問題（更にはゼロ冠詞の問題）は扱わない。以下話を主に定冠詞に限定して具体的に見ていこう。

2. ルーマニア語の冠詞

上記の名詞の形式部の各要素のうち、ルーマニア語で言語化されているのは、extencité ,cas d'emploi,nombre,genreの四つである。extensitéは一般性対個別性、cas d'emploiは無格対有格、nombreは単数対複数、genreは男性対女性対中性の区別がある。[6] extensité〔particulier〕は不定冠詞であり、次のような形を持っている。（Mは男性、Fは女性、Nは中性を示す。）

	単 数		複 数
	M N	F	M/N/F
無 格	un	o	な し
有 格	unui	unei	unor

次にextensité〔général〕は定冠詞であるが、ルーマニア語には定冠詞にあたるものが三つあ

る。まず語末冠詞で、形は次のとおりである。

無格	単数		複数	
	M N	F	M	N F
	-ul, -le	-a	-i	-le

（例）

M bărbat → bărbatul, bărbați → bărbații（男 単・複）

frate → fratele, frați → frații（兄弟、単・複）

F fată → fata, fete → fetele（女、単・複）

N parc → parcul, parcuri → parcurile（公園、単・複）

有格	単数		複数	
	M N	F	M N	F
	-lui	-i[7]	-lor	

M bărbat → bărbatului （casa bărbatului その男の家）

bărbați → bărbaților （casa bărbaților その男たちの家）

F doamnă → doamnei （casa doamnei その婦人の家）

doamne → doamnelor （casa doamnelor その婦人たちの家）

N parc → parcului （posesorul parcului その公園の持主）

parcuri → parcurilor （posesorul parcurilor それらの公園の持主）

次は所有冠詞と呼ばれるもので、もちろん、所有形容詞、所有代名詞とは区別される。これには有格形はない。（例は省略）

単数		複数	
M N	F	M N	F
al	a	ai	ale

最後は指示冠詞で、これも指示形容詞、指示代名詞とは区別される。（例は省略）[8]

	単数		複数	
	M N	F	M N	F
無格	cel	cea	cei	cele
有格	celui	celei	celor	

以下、これら三つの定冠詞を見ていくが、まずその分布を見てみよう。（以下の各項目は、一緒に用いられるもの、冠詞自身の名称など、統一がとれていない。）参考のため、それらに対応するフランス語の定冠詞の有無もつけ加えた。

(i) 名詞に関するもの

	①-ul	② al	③ cel	④ 仏
(1) 名　詞	+			+
(2) 名詞の属格		+		

(ii) 形容詞に関するもの

	① -ul	② al	③ cel	④ 仏
(3) 形 容 詞	+		+	+
(4) 所有形容詞		+		(+)
(5) 形容冠 詞			+	(+)
(6) 最 上 級			+	+
(7) 数　詞	+	+	+	+

(iii) そ の 他

	① -ul	② al	③ cel	④ 仏
(8) 形容詞＋名詞	+			

それではこの(1)〜(8)を中心にして順次見ていこう。

3.1 名　詞

名詞と冠詞の関係は第一節で見たとおりである。三種の定冠詞のうち、名詞につくことができるのは語末冠詞のみである。（次例参照）

(1) calul（le cheval 馬）

(2) *cel cal

acest cal 又は calul acesta（ce cheval この馬）

(3) *al cal

3.2 名詞の属格

同じ名詞でも次に別の名詞の属格（つまり有格形）がくると別の冠詞、即ち所有冠詞をとる。この用法の al は特に属格冠詞と呼ばれることがある。これには二つの場合があって、その一番目は、名詞と属格との間に他の要素が入っている場合である。

(4) caca frumoasă a prietenului meu

家　美しい　友人（属）　私の（私の友人の美しい家）

(5) suprafaţa rotundă a pămîntului

表面　丸い　大地（属）（大地の丸い表面）

(6) a *casa a prietenului

b casa prietenului

この属格冠詞は、いわゆる head の名詞の形式部に一致し、しかも head の名詞はそれ自身語末冠詞をとっていることに注意されたい。第一節で見たように、caşa は〔casa → a〕という内的 incidence を持っており、frumoasă はこの casa にかかる外的 incidence を持っている。また、prieten-

ului は〔prieten→ului〕という内的 incidence を持っていてこれで完結しているので、属格冠詞のaが浮き上がってしまう。一体これではどう説明すればよいのだろうか。ここで(6)bを考えてみよう。これは最も普通の場合であるが、これの incidence 関係を図式的に示せば次のようになろう。

〔casă → a〕　　〔prieten → ului〕

つまり、prietenului の形式部のうちの cas d'emploi 〔génitif〕は、その直前の語に対して incidence を持つ、という機能を持っている。ところが、名詞と属格名詞の間に他の要素が入るとこの新たに生じた外的 incidence がこの要素にかかる、という不都合が生じる。属格冠詞はこの不都合を取り除く役目をもつ小辞で、head の名詞の形式部だけをコピーしたもの、と考えられる。前後二つの名詞はこの小辞によって間接的に結ばれることになる。これを図式的に示せば次のとおりである。[9]

〔casă → a〕← frumoasă　a　〔prieten → ului〕

これはフランス語の、la belle maison de mon ami の de と同じ働きをしている。[10] これを生成変形文法的に考えると、フランス語の de、英語の of と同様、基底では生成されない、いわゆる grammatical formative と考えられる。従って属格冠詞の挿入規則が必要であるが、それはおおむね次のようになるだろう。

(7) $[NP_i - X]_{NP} - \left[\begin{bmatrix}DET\\Art\\def\end{bmatrix} - N\right]_{NP} \rightarrow [NP_i - X]_{NP} - al_i - \left[\begin{bmatrix}DET\\Art\\def\end{bmatrix} - N\right]_{NP} \quad X \neq \phi$

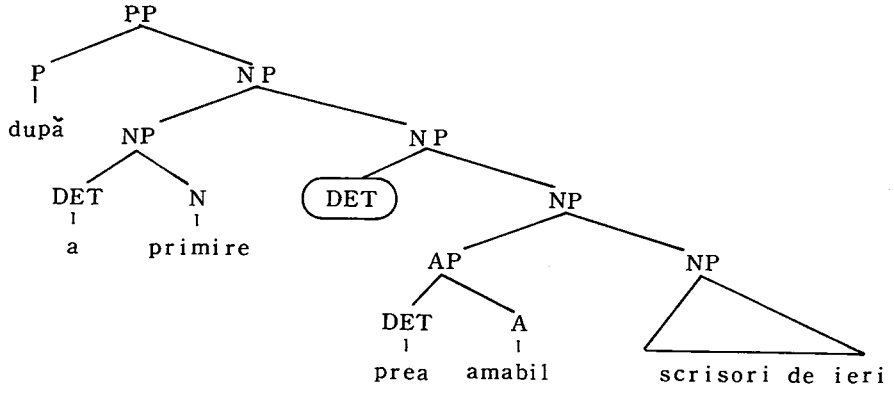
ここで〔DET, Art, def〕は、名詞の形式部を全て含むものとする。また、NP と al に指標の i を添えたのは、最初の NP と al が性、数に於いて一致するためである。

ところで、これには一見したところ、例外と思われるものがある。

(8) după primirea prea amabilei scrisori de ieri
　あと　受け取ること　大変　親切な（属）　手紙　　きのう
（きのうの、大変親切なあなたの手紙を受け取ったあとで……）

(9) folosirea mai mult ca perfectului
　用法　　より 大きい～より 完了（属）　（大過去の用法）

(8)は head 名詞の primirea と属格形の amabilei（実はこれは scrisori にかかる形容詞なのであるが、形容詞が冠詞をとることについては後述する。また、副詞の prea に冠詞がついていないことにも注意されたい。）の間に prea という他の要素がきているのに属格冠詞がない。また、(9)では、head の folosirea と属格の perfectului の間には mai mult ca という三つの要素があるのにやはり属格冠詞がない。実は、これは、(8)では prea amabilei scrisori，(9)では mai mult ca perfectului が単一の構成素（constituent）を形成しているためなのである。(8)は第三図のような構造をもっている。



＜ 第3図 ＞

第三図で丸で囲んだDET が(7)の〔DET, Art, def〕に相当する。従って(8)は(7)の構造表記にあてはまらず、(7)は適用されない。それ故、属格冠詞は出現しない。そしてDETは、head 名詞がある時はその名詞に、名詞の前に形容詞がある時はその形容詞に、各々語末冠詞という形で付加される。またこのように形容詞も考慮に入れねばならないので、(7)は次のように改めねばならない。[11]

(10) $[NP_i - X]_{NP} - [\begin{bmatrix} DET \\ Art \\ def \end{bmatrix} - \begin{Bmatrix} N \\ A \end{Bmatrix}]_{NP} \rightarrow [NP_i - X]_{NP} - al_i - [\begin{bmatrix} DET \\ Art \\ def \end{bmatrix} - \begin{Bmatrix} N \\ A \end{Bmatrix}]_{NP} \quad X \neq \phi$

さて、属格冠詞出現の条件の二つ目は、直前の名詞が語末冠詞をとらない場合である。

(11) doi prieteni <u>ai</u> fratelui meu
二　友人　兄弟(属)　私の（私の兄弟の二人の友人）

ここで重要なのは語末冠詞ということで、これ以外の冠詞又は冠詞相当語句ならすべてOKである。

(12) a cele şapte minuni <u>ale</u> lumii
七　ふしぎ　世界(属)（世界の七不思議）
b *şapte minunile ale lumii

(13) a un prieten <u>al</u> vecinului
友人　隣人(属)（隣人の友人）
b *prietenul al vecinului

(14) cel mai mare succes <u>al</u> anului
最も　大きい　成功　年(属)（今年一番の成功）

また、直前というのも重要な条件である。（直前に head 名詞が来ない、というのが一番目の条件であった。）[12]

(15) a A venit domnul preşedinte <u>al</u> asociaţiei
助 来るのPP　長　会（属）（会長様がいらっしゃった）
b *A venit preşedintele al asociaţiei

こう見てくると、a l の出現条件は意味的なものではなくて、純統語的なものであることがよくわかる。a l のもつ機能、特に言語化という観点からの役割の解明はGuillaume 理論のよくするところで、さすがに役に立つ、という感じだが、このような統語的な分布の説明（或いは記述）は生成変形文法のよくするところである。この二つの理論は、もちろん、よって立つところの根本的な仮説は異なるけれどお互いに相補うところをもっているように思える。

ところで、この二番目の条件の語末冠詞であるが、これとよく似た別の現象がルーマニア語で他にも見られる。それはルーマニア語の非ラテン的特徴の一つである代名詞の二重使用である。直接目的語が事物を表わし（即ち、classe〔non-animé〕）、動詞の前にきて語末冠詞をとる時（例(16)、(17)）又は人間を表わす名詞で、前置詞peによって導入され、動詞の前にくる時（例(18)、(19)）、代名詞をくり返して用いる。

(16) Adevărul nu-l ştiu.
　真実　否　知る（私は真実を知らない。）

(17) Sarea ai găsit-o?
　塩　助動　見つけるのpp（君は塩を見つけたか）

(18) Pe prietenul dumneavoastră nu l-am văzut de mult.
　友人　あなたの　助動 会うのpp　多く
（あなたの友人にはもう長いこと会っていません。）

(19) Pe Ana am cunoscut-o la munte
　アナ 助動　知るのpp　〜で　山　（アナとは山で知り合いました。）

ここで重要なのは、事実を表わす名詞の場合、定冠詞（語末冠詞）が存在することが条件になっていることである。これに対して人間を表わす時は語末冠詞はなくてもよい。[13]

(20) *Un adevăr nu-l ştiu.

(21) ? Acest adevăr nu-l ştiu.

(22) a Pe profesorul îl cunoaşte.
　b Pe profesor îl cunoaşte.

これは語末冠詞の特殊性、むしろ力の強さを示す例であろう。もし、他の言語でも、定冠詞のみが引きおこす言語現象があるとすれば、これはその平行例となって、普遍性の追求の一助となるかも知れない。また、classe が言語学的に関与するというのも興味深い現象である。

3.3 形 容 詞

これはフランス語にも見られる現象で、定冠詞をつけることによって形容詞を名詞化する（substantivation）。ルーマニア語では語末冠詞と指示冠詞がこの役目を果たす。

(23) bătrîn → bătrînul
　老いた → cel bătrîn　（老人）

しかし、-ul と cel は全く同意ではない。bătrînul の方は le vieux という意味なのに対して、cel bătrîn の方は celui qui est vieux(acela care e bătrîn) の意味だという。（Lombard（1974））しかし、それにも増して重要なのは、他の形容詞が付くことができるかどうか

という統語論的な基準である。即ち本来の名詞、又は本来の名詞扱いされるものには形容詞がつく（つまり、incidenceが向かう）が、そうでないものにはつかない筈である。bătrînulには形容詞がつき、cel bătrîn にはつかない。

(24) bietul bătrîn（<biet + bătrînul）（あわれな老人）
あわれな

(25) a *bietul cel bătrîn（*biet cel bătrîn）
b *cel bătrîn biet

これからもわかるように、cel bătrîn は、少なくとも統語論的には、完全な名詞でないことがよくわかる。これをGuillaume 流に説明すると、bătrînulは完全に概念部bătrînと形式部-ulとに分かれて、前者から後者へのincidenceがあるのに対して、cel bătrîn の方は、cel にまだmatière（多分それはダイクシスと考えられる）が少し残っており、celとbătrîn間のinciden-ceが不完全である、という風になると思われる。[14] この説明の可否はどうあれ、完全な名詞を作るのは語末冠詞だけである、というのは正しい結論であろう。ところが、生産性ということになると、逆に-ul の方には制限がある。

(26) bătrînul ／ cel bătrîn, tînărul ／ cel tînăr（若者）
bogata ／ cea bogată（金持）

(27) *scumpul ／ cel scump （scump 値が高い）
*marele ／ cel mare（mare 大きい）

この制限の条件はよくわからないが、このデータを見る限り、classeが関与しているようである。もしこれが正しければ、前の代名詞の二重使用の際に見たのと同じ制約が存在することになり、かなり興味深い結論が得られそうだが、ここではこれ以上追究しないことにする。

3.4 所有形容詞

フランス語では être à ～ 又は定冠詞が対応する。

(28) Cartea este a fratelui meu.（Le livre est à mon frere）
(29) Cărţile sînt ale susorilor mele（Les livres sont à mes soeurs.）
(30) Al cui e băiatul ?（A qui est le garçon ?）
(31) E al meu.（Il est à moi.又はIl est le mien.）
(32) Fiica ta este sănătoasă. A mea nu e.
（Ta fille est en bonne santé . La mienne ne l'est pas.）

(28) (29) は前に見たalと同じ機能を持っていると考えてよい。即ち、fratelui, susorilor のもつcas d'emploi〔génitif〕の外的incidenceのかかるべき対象が直前にないため、cartea の形式部のコピーa，cărţileの形式部のコピーale が出現したものである。(30)も、al cui が文頭に来ているのはルーマニア語のdiscours 規則によるもので、langue レベルではBăiatul e al cui であるから、同様に考えられる。また、ルーマニア語にはフランス語の le mien, la mienne の系列に相当するものがない。meu, mea の系列は mon, ma のような所有形容詞で、従って incidence の向かい先を必要とする。そこで再びalの登場となる訳で、この場合alのコピーは anapho-

riqueである。即ち、(31) では (30)の băiatul, (32)では前の発話のFiicaである。

3.5　形容冠詞

これはルーマニア語独特のもので、形容詞や前置詞句が名詞的に用いられる時や、形容詞、前置詞句を強調する時に用いられる。（直野（1967,1977））例を見てみよう。

(33)　pîinea cea de toate zilele
　　パン　　全て　　日　（日々のパン）

(34)　Ştefan cel mare　（シュテファン大王）

(33)はceaがなくても適格である。ということはincidence 関係はこれで完結しているということで、間に何らかの要素が入るとこの関係が崩れてしまう。この解決の一つとしては前に見たalの導入がある。しかしceaの場合はそれ自身が殆んど形式部のみ（matièreはほんの少し残ってはいるが）なのでその必要はなく、pîineaの形式部を受けつぐことにより、deからのincidenceを受けることができる。この役目を果たせるのはもちろん形式部のみをもつ冠詞類のみだが、強調という意味、つまり自分自身の概念ではなく他の概念に依存するごく弱いmatièreを持つのはcelのみである。従って、ここではcelのみが用いられる。(34)は第3.3節で見たのと同じであるが、次の例も名詞化の例である。

(35)　cei de faţă　（正面にいる人たち、出席者）
　　正面

(36)　cel de-al doilea（二番目の人）
　　二番目

この場合、(35)ではde faţăに語末冠詞をつけるのが不可能なこと、(36)ではdoileaに既についていること、がcelのもつ微小matièreと相まってcelの使用を支持しているものと思われる。

3.6　最　上　級

これも形容冠詞の一種である。

(37)　Al treilea şi cel mai tînăr fiu al împăratului e Petru.
　　三番目　そして　　若い　息子　　皇帝
　（帝の三番目の、一番若い息子はペトルです。）

(38)　cel mai înalt vîrf al Carpaţilor
　　高い　頂上　　（カルパチアの最も高い頂き）

前節と同じように考えていいだろう。即ち、ルーマニア語では形容詞は後置されるのが普通で、それが前置されるのはスタイル、強調、意味の変化など、何らかの要因のせいである。（3.8節参照）従って、(37)はfiul cel mai tînăr, (38)はvîrful cel mai înaltが基本的な形で、前節で述べたことがそっくりあてはまる。[15]

3.7　数　　詞

三種類の定冠詞全てが数詞と共に用いることができる。

(39) trei oamenii

(40) = (12) cele șapte minuni ale lumii

(41) = (37) Al treilea și cel mai tînăr fiu…

但し、基数詞は語末冠詞と指示冠詞、序数詞は所有冠詞のみである。語末冠詞と指示冠詞の違いは第3.3節で見たものと同じであろう。なぜ序数詞に al だけが用いられるのかはわからない。[16]

3.8 形容詞＋名詞

フランス語とちがって、ルーマニア語では形容詞＋名詞という syntagme の形容詞に冠詞がつく。

(42) a băiatul frumos

少年　美しい　（美しい少年）

b frumosul băiat

(43) a gloria ofițerului curajos

栄誉　将校　勇敢な　（勇敢な将校の栄誉）

b gloria curajosului ofițer

(44) a farmecul fetei frumoase

魅力　少女　（美しい少女の魅力）

b farmecul frumoasei fete

ここで注意していただきたいのは (44)b である。(42)b, (43) bでは各々 băiatul → băiat, ofițerului → ofițer となっているのに (44) b では fetei → fată とはならずに fete のままになっている。もう少し例を挙げると

(45) a fratele prietenei frumoase

兄弟　女の友人　美しい　（美しい女の友人の兄弟）

b fratele frumoasei prietene.（＊prietenă）

(46) a fratele prietenelor frumoase

女の友人（複）　（美しい女の友人たちの兄弟）

b fratele frumoaselor prietene

形容詞にも形式部と概念部があるが、形式部の方は名詞のそれとはかなり異なっている。まず第一に形容詞には personne がない。そして第二に、形容詞の形式部は全て固有のものではない。つまり呼応（accord）又は一致（agreement）によって具体的な形を与えられるのである。別の言い方をすれば、形容詞の形式部は潜在的（virtuel）で、名詞との incidence によって初めて顕在化（actualiser）される。これはフランス語もルーマニア語も同じである。名詞では冠詞が受けもつ役割を、形容詞では語尾（そして時には語幹の母音・子音も）が受け持つ。ところが形容詞が前置されるとルーマニア語では、上の例で見たように、各詞が裸になって全ての形式部は形容詞に集中する。今、形式部をF、概念部をMとして図式的に表わすと次のようになろう。

名詞＋形容詞

$$\left[\,[M] \rightarrow [\alpha F]\,\right]_N \leftarrow \left[\begin{array}{c}[\alpha F]\\ \uparrow \\ [M]\end{array}\right]_A$$

形容詞＋名詞　　＜ 第4図 ＞

$$\left[\left[\begin{array}{c}[\alpha F]\\ \uparrow \\ [M]\end{array}\right]_A \rightarrow [\alpha F] \leftarrow [M]_N\right]_{NP}$$

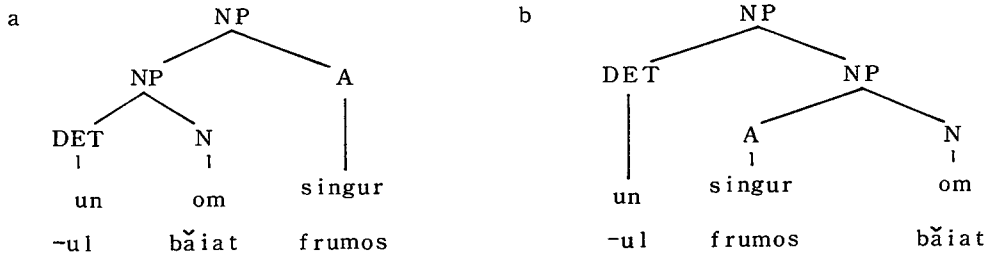
（実線矢印は incidence，破線は一致を示す。）

前にも少し触れたが、ルーマニア語では形容詞が後置されるのが基本的順序で、それが前置されるのは何らかの他の要因による。場合によっては意味の変わることもある。（次例）

(47) a un om singur（ひとりぼっちの人間）

b un singur om（唯一の人間）

従って、前置の場合、極端には別の一種の複合語になる訳である。このことから、名詞＋形容詞、形容詞＋名詞の構造は次のようなものと考えられる。[17]



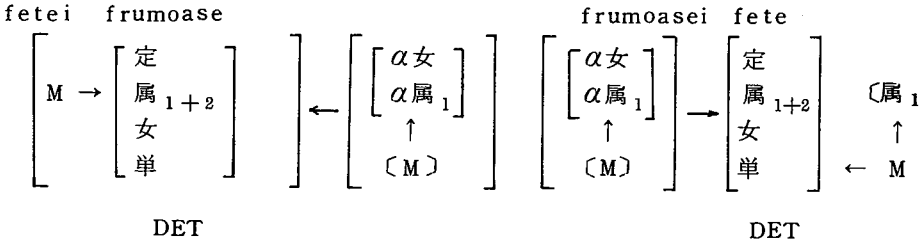
＜ 第5図 ＞

そして、冠詞後置規則は次の如くになるだろう。

(48) $$\begin{bmatrix}DET\\ Art\\ def\end{bmatrix} -\left\{\begin{matrix}N\\ A\end{matrix}\right\} -X \rightarrow \varnothing -\left\{\begin{matrix}N\\ A\end{matrix}\right\} + \begin{bmatrix}DET\\ Art\\ def\end{bmatrix} -X$$

ただここで問題が一つある。第五図のａ，ｂは各々形容詞後置、前置の構造図だが、生成変形文法的に考えるならば、基底からａ，ｂが存在するのか、それとも、一方は他方から派生するのか、という問題である。もちろんａ型、ｂ型の構造が両方共実際に存在するのだから、わざわざそういうことを考える必要はない、という考え方もできる。しかし、ａとｂは強調等の若干の付加的意味を除くと殆んど同義であること、ａからｂ（もしくはｂからａ）への転換は極めて生産性が高いこと、つまり、ルーマニ

ア語話者の頭の中でごく普通に行われる操作であること、を考えると、aとbの間にある関係を明らかにすること（つまり派生関係を明らかにすること）は必要であろう。ところでaとbの派生関係は理論的には三つある。即ち、a → b、b → a、c → aかつc → b（cはaでもbでもないもの）[18] しかしここでは、前にも何回か触れたように、a → bの場合と考えてもいいだろう。第5図を見るとaもbもDETがhead名詞の形式部を引き受けており、a→bの変化は、形容詞がhead名詞の前に移動し、その名詞と共に一つの構成素NPを形成している（従って、bのDETはNではなくてNPのDETとなっている）、というだけにすぎないように見える。そして事実、băiatul frumos → frumosul băiat, fata frumoasă →frumoasa fată ではそのとおりである。ところが (44), (45), (46) で見たように、cas d'emploi 〔 génitif 〕 の場合はこうすっきりとはいかない。男性（そして中性）の場合は問題はないが、女性の場合が問題である。注(7)で触れたように、女性名詞の有格形は複数形（と同じ形）にiという語尾を加える。という二段階の操作によって作られる。そしてfarmecul fetei frumoase → farmecul frumoasei fete の変化ではfetei →fată ではなくてfetei → feteと第一段階がそのまま残っている。[19] 今、extensité を定、cas d'-emploiを属、genreを女、数を単、一致の印をα、概念部をM、有格形形成の第一段階を属$_1$、第二段階を属$_2$、で表わし、第四図にならってfetei frumoase → frumoasei feteを図示すると次のようになろう。



＜ 第6図 ＞

結局のところ、問題は次の四つになる。(i)名詞に〔属$_1$〕という形式部要素が残っているとすれば（それ故複数形と同じ形をしている）、そのincidence関係はどうなるのか、(ii)この〔属$_1$〕と、もう一つの形式部要素の〔複〕との関係はどうなのか、言い方を変えると、形容詞の形式部要素に〔α単〕が現われないで形態的には〔複〕と同じ効果をもつ〔α属$_1$〕が現われるのはなぜか、(iii)なぜ〔属$_1$〕だけ残るのか、(iv)なぜ女性名詞だけにおこるのか。残念ながら目下のところ解答はない。(i)→(iii)については色々考えることもできようが、これらのことが女性名詞だけにおこるということの説明は、性（genre）というものをもっと深く考察しないと、恐らく不可能だと思われる。

4. 三つの冠詞の分布

(49) omul al treilea

(50) = (36) cel de-al doilea

(51) calul frumos al vecinului

馬　美しい　隣人　（隣人の美しい馬）

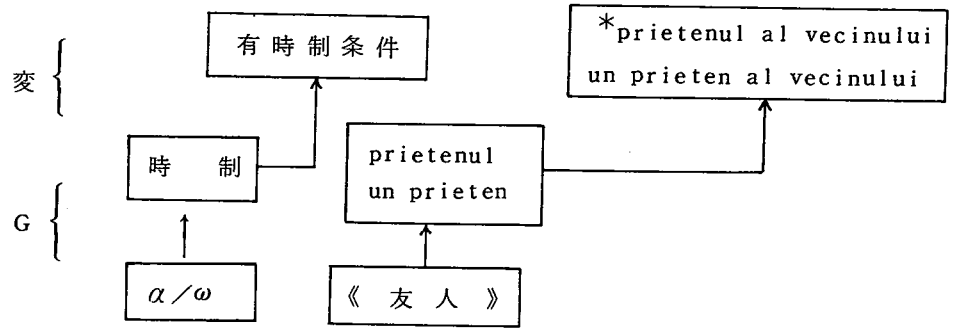
(52)　calul cel frumos al vecinului

(49)と(51)は -ul と al の組み合わせ、(52)は -ul と cel と al の組み合わせで、いずれも head 名詞には -ul がついている。また(50)では cel が単独で用いられているが、head 名詞がない。このことから、最も基本的な冠詞は語末冠詞だと言える。ということは所有冠詞の al、指示冠詞の cel は基底では生成せず、挿入規則で派生するということである。但し、指示冠詞は matière を微小ながら持っていると考えられるし、3.3節の用法などを考えると、基底で生成した方がよい場合もある。[20]

5. おわりに

本稿の目標は、冠詞に関する最大の理論である G. Guillaume とその一派の考え方をふまえつつも、extensité に重点をおきすぎるきらいのある点を不満として、extensité 一本槍では扱いにくい現象に焦点をあてて、他の可能性を探っていくことであった。未解決の問題を多く残したため、この目標が達せられたが、甚だ心もとないが、それでも Guillaume 理論だけでは不十分な現象もある。ということは示せたと思う。

ところで、本稿では Guillaume 理論の他に生成変形文法の考え方が取り入れられており、人によっては、根本的な立場の違うこの二つをまぜこぜにするのは無節操極まりない、と考えるかもしれない。確かにこの両者の基本的な仮定は異なっているが、実際面ではこの二つは互いに補い合っている、というのが筆者の意見である。Guillaume 理論は psycho-mécanique の名が示すように、ある概念を言語化する際の精神の働きを、動きの中の位置によってとらえようとするのに対して、変形文法は、適格文のみを生成する文法、そして各個別文法の根底にある普遍文法を組み立てようとする。話を冠詞の問題に限れば、Guillaume 理論は定、不定とはどういうことか、概念を言語化するのに定、不定はどのように関与するか、といったことが関心の対象であるが、変形文法では、定、不定という素性をもつことによって、移動などの変形にどのような制限があるか、ということが関心の対象となる。従って、各々適した領域があり、冠詞とか時制といった言語化の本質的な領域は Guillaume 理論の、そしてA文が適格なのにB文が不適格なのはなぜか、どこがおかしいのか、といった、冠詞、時制をはじめから存在する道具として用いて議論するのは変形文法の、各々の特技である。その一例として時制のことを考えると、Guillaume 理論では chronotype ω と α によって様々な時制を説明するが、変形文法では時制のもつ意味よりもむしろ時制を一つの素性と見なして有時制条件 (Tensed S condition)といったものを考える。[21]　また、冠詞にしても Guillaume 理論は prietenul と un prieten の違いを extensité の観点から考えるが、変形文法ではむしろ、前に見たように、un prieten al vecinului ／ *prietenul al vecinului の対立を、定、不定をやはり一種の素性として考えて、説明するのである。



上の図でも明らかなように、この二つは相補なう関係にあるのである。

また、本稿では対象言語としてルーマニア語を選んだため、フランス語相手だけでは気がつかなかった点が多く出てきて興味をそそられる点が多かったが、本格的なルーマニア語、フランス語比較対照研究にまで至ることはできなかった。これは次の機会に是非やりたいと思っている。

〔注〕

(1) これは冠詞がないのではなく、ゼロ冠詞という冠詞があると考える。Guillaume 自身はゼロ冠詞については余り述べていないが、フランス語のゼロ冠詞についてはMoignet(1981)、オランダ語についてはS de vriendt(1980)、参照のこと。またゼロ冠詞を認めない立場もある。これについてはFurukawa(1978)参照

(2) それに対して動詞は incidence が外に向かう。たとえば、Paul chante に於いて chante は主語の Paul に対して外的な incidence を持っている。

(3) Moignet(1974) と Moignet(1981)では、この点に関して若干の微妙な差が見られる。前者では、incidence は概念部から形式部へ向かう、となっているが(図 a の上向きの矢印)、後者では incidence は概念部から personne に向かうとなっている(図 b)。また下向きの矢印も前者では概念部までつき抜けているのに対して、後者では personne で止まっている。

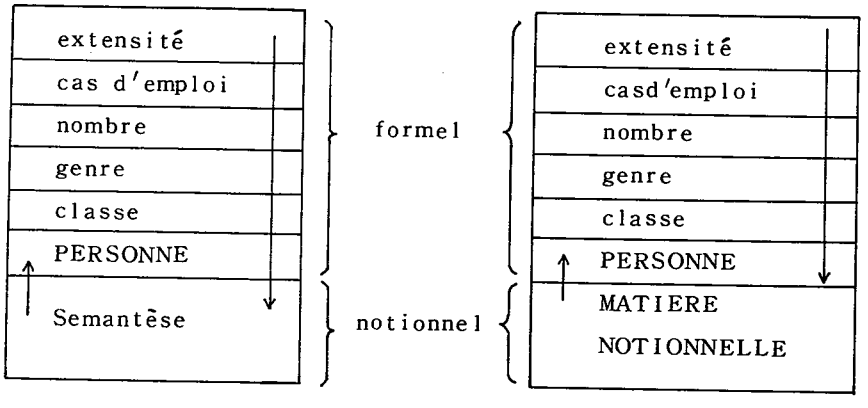


図 a　　図 b

(4) このような、形式部と概念部の分離という現象は他にも見られる。たとえば J'ai marché に於けるavoir は形式を、marché 概念を分担し、J'ai faim のような locution verbale では avoir が形式、faim が概念を分担している。

(5) Personne は、personne cardinale と呼ばれるもので、必ず三人称で不変である。Moignet(1974・1981)参照。

(6) 格のうち、有格は、いわゆる属格と与格に対応する。また、性のうち中性は独自の形を持たず、単数では男性形、複数では女性形をとる。但し、名詞の複数語尾に関してのみ、独自の形態をもつ。

(7) 女性単数有格形は、女性複数形に i を加えて作られる。
doamnă(単)　doamne(複)　doamnei(単、有格)

(8) ルーマニア語の所有形容詞や指示形容詞などについてはLombard(1974)を参照。

(9) このコピーされる部分、そして属格名詞の外的 incidence の発生は、cas d'emploi と思われる。即ち、nominatif ← génitif という基本的な関係がずっと維持されている。

〔casă → [a 〔nom〕]〕 ← frumoasă [a 〔nom〕] 〔prieten → [-ului 〔gén〕]〕

(10) Moignet(1981)によれば、前置詞は固有の概念部を持たず、二つの名詞を関係づけるだけの役目を果たす。この考え方は筆者の考え方とかなり異なっているが、de に関しては殆んど一致している。つまり、筆者の考えでは de の part 部(即ち、概念部に相当)はゼロだからである。筆者の考え方については林(1980)及び林(1981)を参照していただきたい。

(11) このように、名詞と形容詞を、ある規則に関して、一つの範疇にまとめるということは、Moignet(1981)が、名詞と形容詞を nom という一つの範疇にまとめたことと一致して、彼の考え方の正しいことを示している。これはまた、Jackendoff(1977)の$\overline{X}$理論のとる考え方とも合致している。

(12) 問題は一番目と二番目の条件が反する場合である。
a　această carte a vecinului　(隣人のこの本)
b　cartea aceasta a vecinului
aは普通の名詞句だが、bは語末冠詞が属格名詞の直前にきており(această と aceasta を比較のこと)、しかも head は cartea であって属格名詞とは aceasta によって隔てられている。もしbが適格であれば一番目の条件の方が強いことになるし、もし不適格であれば二番目の条件が強いこと

になる。

(13) 実のところ、語末冠詞が決定的な要因なのかは簡単には決められない。というのは、(20)からわかるように、定冠詞が決定的要因だということはわかるが、果たしてそれが語末冠詞に限るのかは、直接目的語になり得る語は圧倒的に語末冠詞しか取れないので、決定できない。(21)が不適格であれば問題は統語論的になって、ある程度語末冠詞について肯定的なことが言えるが、もし適格であれば意味論的な問題になり、語末冠詞というよりも、限定性ということが要因となる。

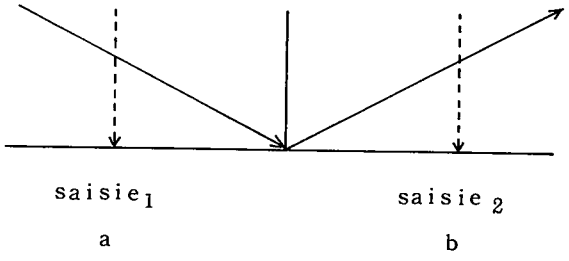
(14) Moignet(1981)では、フランス語のce,cette,ces系列を extensité の観点からのみ論じている。incidence については冠詞と同じように考えているが、指示形容詞acel と、指示冠詞 cel を区別するルーマニア語では同じように考えることはできない。

(15) 形容詞が後置されると fiu,vîrf に各々語末冠詞がつくことに注意されたい。

(16) (40)は七不思議、という一つのまとまりを見せているので、微小matière(これは強調という依存型の概念部しかもっていない)をもつcelが使われている。ṣapte minunile だと、単に七つの不思議ということになる。

(17) フランス語ではこういう現象は多く、意味的基準の他に liaison によって名詞と形容詞の結合の度合を調べることができる。たとえば、un homme grand / un grand homme ,un homme pauvre / un pauvre homme,la semaine dernière / la dernière semaine など。(フランス語では、名詞と後置形容詞との間にはliaisonは行われないが、前置形容詞と名詞との間では義務的に行われる。)

(18) もちろんこれは生成変形文法的な発想である。Guillaume 的な発想では、ある動きの中のsaisieの位置の違いによってa,bが決定される。ということになろう。たとえば次の図のように。



(19) 従って形態上は複数との区別が全然つかないが、そのための混乱はおこらない。形容詞につく冠詞によって判断できるからである。

単 数　farmecul frumoasei fete

複 数　farmecul frumoaselor fete

これは冠詞だけで単複の区別をするフランス語と似ている（ le garçon, les garçons ）が、フランス語では名詞の単複が単数形に統一されているのに対し、ルーマニア語では複数形に統一されている。

(20) フランス語では三つの冠詞の区別がないため、すべて同じ形を使う。たとえば、 la maison la plus ancienne は同形の la を二つ用いているが、この二つの la を同列に扱うことはできないであろう。

(21) Guillaume 理論での時制については Guillame（ 1929 ）参照。また、有時制条件は様々な過程を経て、 Chomsky（ 1980 ）では主格の島の条件（NIC）にまとめられている。

Chomsky, N. 1980, "On Binding", *Linguistique Inquiry*, Vol. 11 No. 1

Furukawa, N. 1978, "Article zéro ou absence d'article?", *Bulletin d'Etudes de Linguistique* Française, Vol. 12

Guillaume, G. 1919, *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Hachette.

_____ 1929, *Temps et verbe*, Champion.

_____ 1964, *Language et science du langage*, Nizet.

Jackendoff, R. 1977, $\bar{X}$ *Syntax: A Study of Phrase Structure*, The M.I.T. Press.

Lombard, A. 1974, *La langue roumaine: une présentation*, Klincksieck.

Moignet, G. 1974, *Etudes de psycho-systématique francaise*, Klincksieck.

_____ 1981, *Systématique de la langue française*, Klincksieck.

de Vriendt, S. 1980, "L'article en Néelandais", *Langage et psychomécanique du langage* (ed. A. Joly et. W. H. Hirtle) Presse Univ. de Lille.

直野　敦，1967，ルーマニア語文法入門，大学書林

_____，1977，ルーマニア語の入門，白水社

林　博司，1980，「前置詞 en, dans の語彙的意味」フランス語学研究第14号

_____，1981，「フランス語前置詞の意味構造」神戸大学教養部論集28号